

三遠南信の

今日

交易が盛んな時代

日本列島を東西に走る幹線道路の旧東海道や旧中山道などに対して、日本海と太平洋を結ぶ南北軸の一つとしてよく知られているのが「塩の道」です。地域によって千国街道・松本街道・信州街道・秋葉街道・三州街道などの街道は、古代は黒曜石の道として、中世や近代には物流・信仰の道として、また戦国武将が通った道として知られ、物資輸送に限らず、人々の交流や芸能などの文化伝播の重要な役割も果たしてきました。かつて三遠南信地域で盛んに行われた交易は、こうした道を介して行き交う人々が積み重ねた歴史の中ではぐくまれてきました。



三遠南信地域を縦断する「塩の道」

秋葉街道（別名信州街道）は、天竜川と並行して走る国道152号とほぼ重なり、遠州の浜松から信州の諏訪を結ぶ街道として知られています。この秋葉街道は、秋葉神社と諏訪神社を結んだ信仰の道で、塩のない信濃国に相良（現牧之原市）の塩を運んだことから「塩の道」と呼ばれています。

また、吉田（現豊橋市）からも遠州街道（現在の国道151号）や三州街道を使って信州の塩尻まで三河の塩が運ばれたことから、これらの街道も「塩の道」と呼ばれています。

太平洋沿岸で取れた塩は俵に詰められ、馬の背に乗せて運ばれましたが、山間部の境目で一旦降ろされて、険しい峠越えに備え小ぶりの俵に詰め替えられ、再び馬の背に乗せて峠を越えたといわれています。

この三遠南信地域には、「塩」という命の源を運んだ重要な道が今も残されています。



大正～昭和初期 豊橋 広小路大通り



昭和44年 豊橋駅前



明治中期 とよばし



昭和30年代初め 浜松

廃藩置県による その後の三遠南信地域

江戸幕府を倒して樹立された新政権の明治政府は、版籍奉還を行い、明治4年(1871)廃藩置県を断行しました。これによって全国で300ほどあった藩が一挙に消滅し、それに変わって県が置かれることになりました。この三遠南信地域には、静岡県・堀江県(後の浜松県)、豊橋県、半原県、田原県、高遠県、飯田県などが置かれていましたが、県数はその後変動し、現在の3県の形(愛知県・静岡県・長野県)に落ち着いたのは5年後の明治9年のことでした。

この廃藩置県により失業した武士たちの救済事業として行われたのが、牧之原台地の開拓で、ここには茶畑が造成され今日まで続いています。

天竜川の舟運が、本格的に活躍するのは明治になってからで、王子製紙の気田工場や中部工場から「紙舟」が、久根、峰之沢、鉦山の「鉦石舟」が、風に帆を膨らませて川を上り下りしたといわれています。大正から昭和初期にはより多くの舟が往来し、

プロペラを使った舟も使われるなど、大量の物資が往来し活発な交流が行われたことが分かります。

また、戦国時代には今川義元や武田信玄の領土に組み込まれたこともあって、東三河地域は歴史的に遠州や南信州(伊那地方)との繋がりが深く、とくに遠州地域とは非常に強い繋がり関係にありました。とくに飯田線が開通すると、交流は一層活発になりました。この三遠南信地域は歴史上からも交流を深める条件を持っていたということがいえます。



帆掛け舟

写真左＜提供：藤井武義氏＞
写真右左＜提供：朝倉淳一氏＞
写真右中＜提供：小久保敏夫氏＞

明治以降の 産業の立地・集積の時代

三遠南信地域の産業発展の歴史は、天竜川・豊川の2本の大河とともに歩んできました。河川の利用方法は、古くは舟運や筏流しが主流でしたが、明治以降はエネルギーの生産に比重が移り、小規模ではありますが水力発電所が2大河川の水系各所に建設されました。この電気事業の開始によって、豊川鉄道・鳳来寺鉄道・三信鉄道・伊那電気鉄道などの電気鉄道が施設され、昭和18年(1943)には、これらの4私鉄を統合し国有化することで、この地域の大動脈ともいえる飯田線が開通しました。これによって3地域の交流は一層発展し、電源開発のための鉄道が施設され、戦後には佐久間発電所と佐久間ダムが建設されています。さらに下流域では大規模な灌漑用水が作られ、農業の発展に寄与するなど、この事業が果たした役割は大きなものがあります。

明治政府が養蚕業を奨励したこともあって、三遠南信地域では、明治から昭和にかけて養蚕製糸が盛んに行われていたことも

忘れてはなりません。養蚕製糸業は現在衰退してしまいましたが、豊橋の玉糸製糸は昭和30年代には全国の3分の1を生産するほどの活況を呈していました。

現在、東三河地域は、平成9年に豊橋港・蒲郡港・田原港が一本化され、国際貿易港「三河港」が誕生したのを始め、豊橋駅の再開発や複合マリリゾート施設「ラグーナ蒲郡」の建設など着々と都市整備を進めてきています。

また、南信州地域は、飯田市を中心に人形劇や豊かな自然や風土を活かした観光や、エコツーリズムの拠点としてモデル地区に指定されるなど、新たな道を切り開きつつあります。

遠州地域は、明治22年(1889)に東海道線が開通すると、浜松には綿織物工業と楽器工場が多く集まるようになりました。戦後は東海道新幹線や東名高速道路が建設され、この地域は東海地方の農業と工業の要衝として発展し、昭和59年に浜松地域テクノポリス計画が承認されました。浜松市は平成19年には政令指定都市の仲間入りを果たしています。

三遠南信自動車道は、飯田市と浜松市北区を結ぶ延長約一〇〇kmの高規格幹線道路で、一般国道四七四号の自動車専用道路として計画され、全線早期開通を目指し着実な整備が進んでいます。完成すれば南信州と東三河・遠州地域との時間距離を大幅に短縮するため、新たな観光資源の活用・産業の進展・過疎地域の振興など、県境を越えた広域的な経済・文化圏の形成に大きく寄与することが期待されています。

三遠南信地域の交流の歴史は古く縄文時代にまでさかのぼると言われています。「塩の道」(塩や生糸の流通)、「秋葉街道」(秋葉神社の信仰)、天竜川の水運をはじめ、江戸時代には馬運業「中馬交通」が物流の飛躍的な拡大をもたらした地域の発展に大きな役割を果たしました。しかし、近代になると自動車交通を支える道路整備の遅れや行政区の違いが障壁となり、地域間の交流は次第に緊密さが薄まってきました。そこで近年、昔のような活気ある交流を復活させ、新たな圏域を創造しようという気運が高まり、かつての秋葉街道や天竜川に代わって三遠南信自動車道の開通に大きな期待が寄せられています。

三遠南信自動車道が繋ぐ…
古代からあった地域の交流
をもっと身近に。



1900年(明治33年)頃の玉糸製糸
糸徳工場内部(豊橋)

明治29年7月 帝国製帽株式会社(浜松市砂山町)



昭和5年 東洋紡 浜松工場



大正3年 鈴木自動車工業株式会社



昭和初期の飯田

